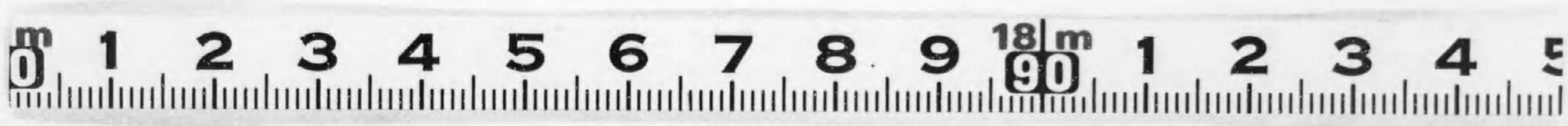
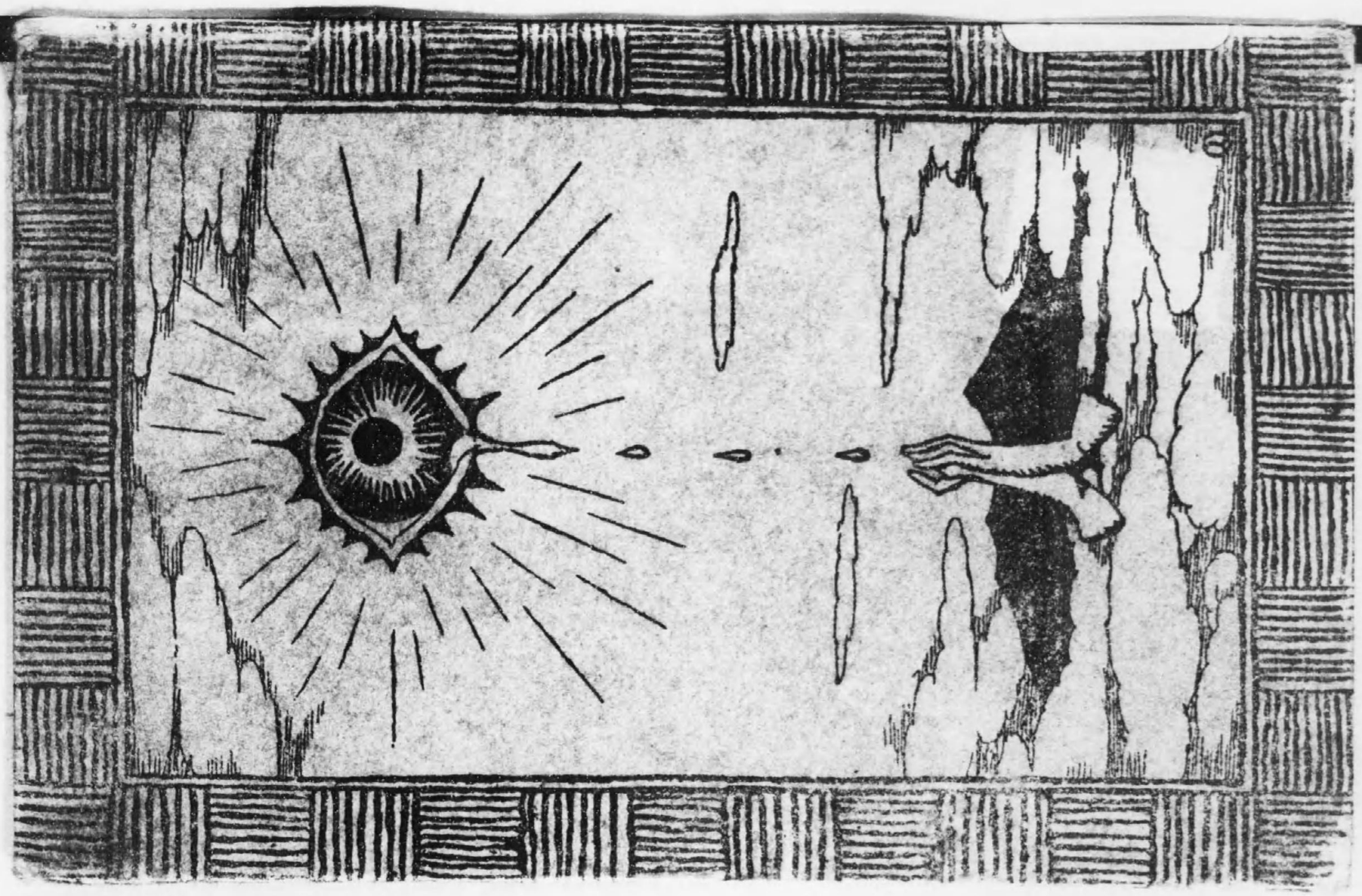
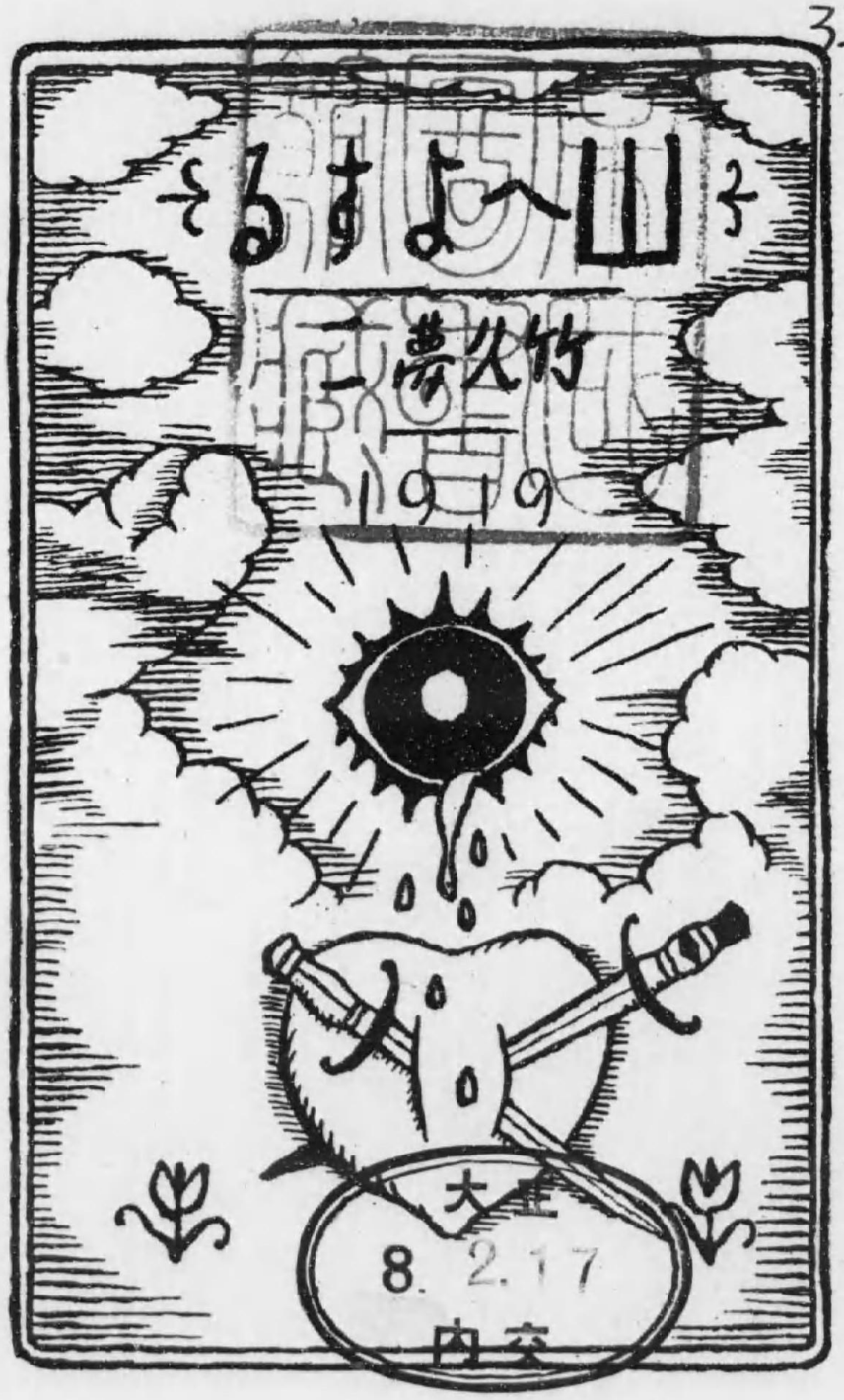

m 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 18 m 90 1 2 3 4 5

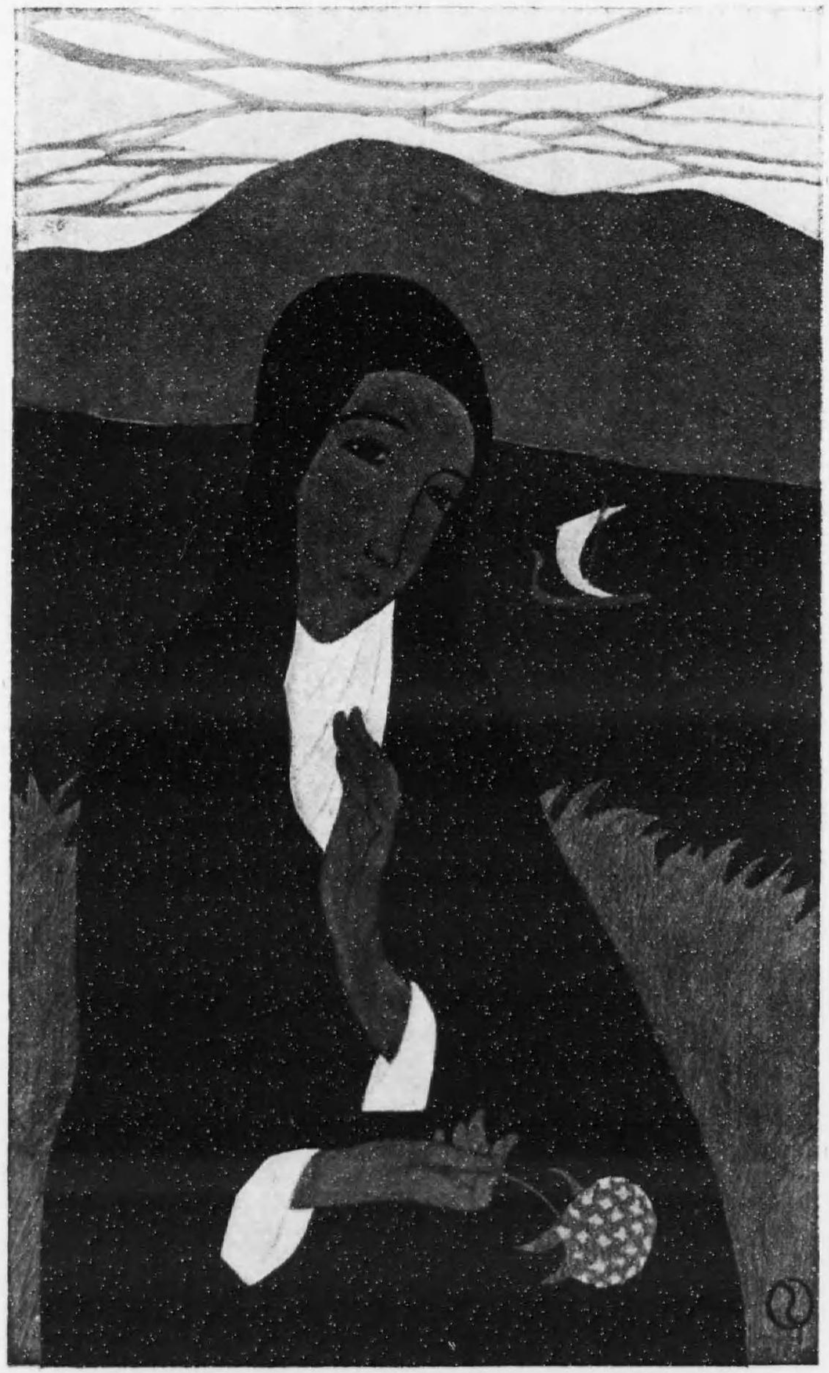


特109
324



KOE · MO
SEN KOSAZU
MO ARAN OSA
KA · · · NO ·

SEKIMORI ·
NARANU · ·
HITONA · ·
TOGAMESO



序の歌

伊藤燁子

わたつみの沖に火もゆる火の
國に我あり誰そや思はれ人は
摩訶不思議噂の生みし我とい
ふ魔性の女いくたりかすむ

茅野雅子

ほれぼれと涙ながして歌ふら
む戀のよろこび戀のかなしみ

うつくしき夢の奥よりこぼれ
來し雫の玉の歌にかもあらむ

與謝野晶子

あたり皆臙脂に染まり行く如
しいと惱ましと語り給へば
誰よりも若くめでたき身を持
ちて物思ふ子は罪に問はまし

桃樹園

山へよする

新春

あかねさす紅の振袖新春の街の巷に逢へる子

やたれ

追羽根のきみがたちまふ緋鹿子のやつくちよ
りぞ春の雪ふる

柳屋の小さんが顔をこそばゆく風わたるらし
大江戸の春

溫室

黑髮の匂ほのかに身はうつゝシネリヤの花べ
コニアの花

露けきに引かばこぼれむ溫室の淡紅のベコニ
アの花

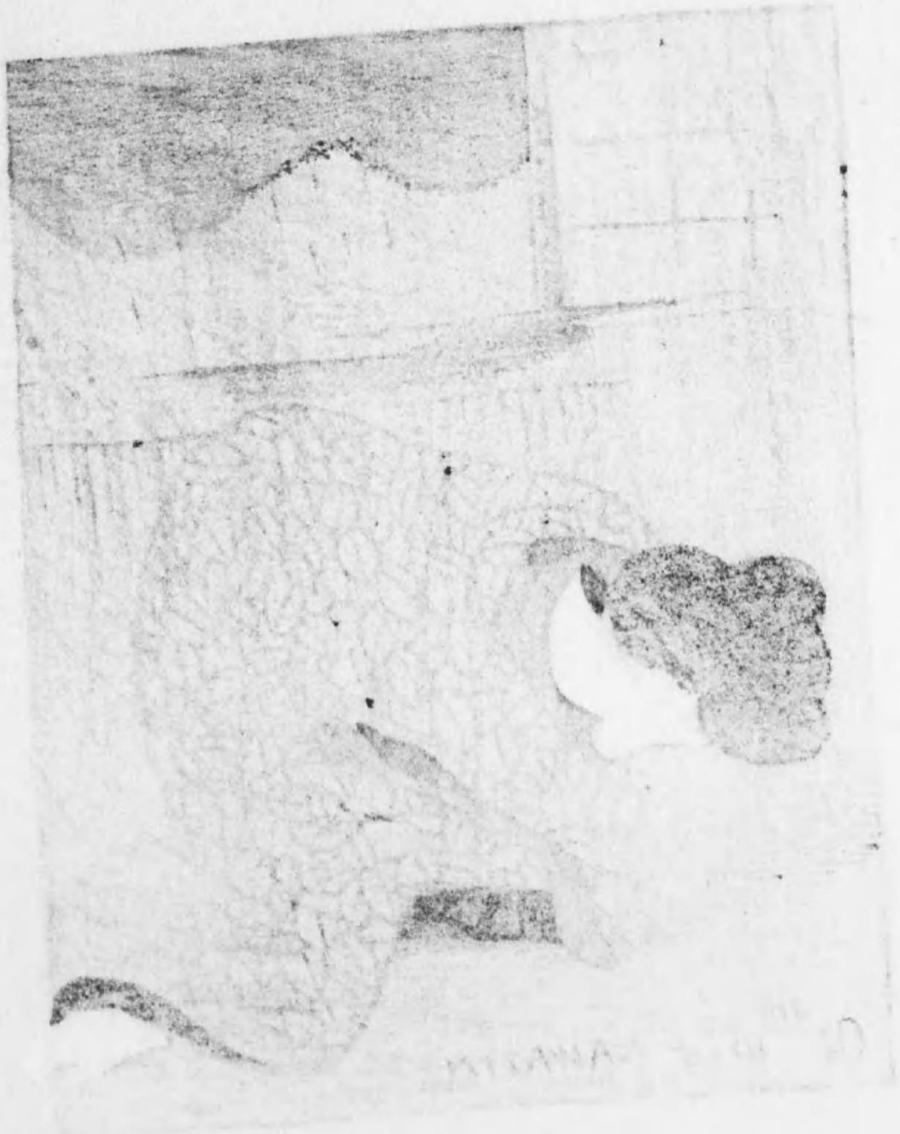
繪筆とる君が横顔クリスチナ・ロセチが妻に似
ると思へり

桃樹園

こは戀か娘心の物怖かこはさはかくも泣くも
のならば

ひたなくを戀と知らばやうばたまの黑髪いた
み慰めかねつ

涙ともいづれ雨ともけぢめなく濡れてさまよ
ふ二人なりしか



果實篇

「青麥の青きをわけてはるゝと逢ひに來る子とおもへば哀し」これはその頃詠んだ歌である。そのやうに青い麥畑の中を、下町の方から通つて來た。空は低く、遲咲きの山櫻の花片が、麥畑の畦に殘んの雪のやうに散つてゐた。

窓から見てゐると、女は息をきらしながら、わざと
ゆつくり近づいて來た。
畳室へ入つて來ると、足袋をぬいで、汗ばむだ踵を
拭いた。
あの子はそれから後もいつもさうした。

白玉のうれはしき子を抱きたればわつと哀し
くなりにけるかな

「過ちか」「いな〳〵いまは身も靈も捧げしも
のを忘れたまふな」

あゝ五月おもはれの子はおとなしく隣の部屋
に衣ずれをきく

なつかしき娘とばかり思ひしをいつか哀しき
戀人となる

なやましく暮れゆく春のこゝろとて花もわつ
さり散りゆきにけむ

ゆく春のけぬがにも花のちりしきてそよらと
紅の帶やときけむ

仇情かけまじものと盟ひしはまことかなしき
あきらめと知る

何かしてふつと涙のうかみくれスウヰトピイ
をつまむとせしに

「何故にかくも寂しき面して妾を見たまふ逢
ひつるものを」

サンタ・マリヤ

サンタマリアこの子とこしへ君に似て清くさ
みしく處女ならしめ

VIRGIN MARY

ニコライのホオルに入りて相擁きサンタ・マリヤを拜みにけり

温室拾遺

温室の雛ぺコニアは淡紅の露もたわわにいまさかりなり

松の内

「淡紅色鹿子をかけて島田にあげましたけれど、誰に逢へるのでもないのです。鏡のまへで泣いてゐます」とのたよりに。

うば玉の黒髪さへも解きがてにむつがるきみを忍ぶ黄昏

人傳のあはれやきみは身もほそり繪筆も文も
燒かれぬといふ

港屋懷古

「來はきつれあまり寢顏のうれしさに覺しか
ねしをとがめたまふな」

雪ふかくつもりつればと凍えし手をわれにあ
づけぬいま來し人は

かたはらにしづかにあるものいふもいはぬ
もよけれわが妻なれば

わが窓のプラタナの葉の散りしくを朝な夕な
に見むとおもへや

吾が髪を細きさ指にあそびつゝもの言ふ子は
もあが妻なれば

わが問ふに答へもやらず袂より手紙いだせし
人なりしかな

伏せし眼の睫毛のひまのつぶら眼の露ふかき
ほどの言の葉もがも

「妬まるゝ身はなほ嬉し白き手のこの獵人を
いましむる身は」

「わがゆきて鈴は引けども空鳴りのいでずば
人にまた逢はめやも」

父が家へきみをおくるとたちいづる戸のもは
いまし春のくれがた

慌しき旅客

焦慮と不安とに胸を閉されつゝ、車窓に身を凭せて
眼は野にやれど山を望めど、眼に見ゆるは黒髪の子
がある夜ある時の姿なりき。

野も山も森も小川もけぢめなくひたに走れる
旅とおもへや

逢ひにゆく旅にしあれど慰まずわが乗る汽車
のやまず走るも

夜をこめて山の峡をましぐらにわがわびしさ
はきはまりにけり

東京驛ホテル六十九番

春風のおとづれよりもたをやかに扉を入る子の美しさかな

たをやかに春の柳のなびくかと君を抱けばし
づごゝろなし

これはこれ旅寢の夢にこがれつるわが少女か
と黒髪をなづ

「このまゝにミイラとなりてはてむもの大天
地のいま覆へれ」

歸らねばならぬ家なり娘なり帶をしめつゝな
げく君かな

「夜の室に君と寂寥と殘しおきかへるこの身を
をとがめたまふな」

指折りて別るゝ日をば數ふなりいぢらしき子
よ逢ひしばかりに

隅田川雨景

幌をふかくおろした俥は、柳橋を渡つて柳光亭の玄關でとまつた。

一蝶もかゝる寂しき夕暮の隅田の川の雨やき

きけむ

帶むすぶひとのけはひを身にしめて岸の柳に
眼をやりしかな

「むすぼれて帶の解けねば好き事の君にあ
べしあらばいかにせむ」

靑き船

京にありし日、日記のはしに書きとめし歌反古なり

高臺寺畔のかりの住居に、思ふはおしのがこと、おしのを待ちつゝ住みわびし三年がほどは、げに憂きことしげかりき。

靑き船波の彼方に愁ひつゝゆきてかへらぬ君

ところおもへ

ひとりなる君を都へ残しおき何とて海へいそ
ぐ心ぞ

これやこの戀は再びすまじうぞ泣かまほしさ
にあゆむ野の道

硝子戸にふつと映りしわが顏の久なりしかな
ぢつと見つむる

たんなたら紫野ゆき嵯峨野ゆき醉へど歌はぬ
男なりけり

加茂葵祭　二首

しんづしづ階廊くだる勅使みむと扇かざしぬ
思はれびとは

びようろうと笙篳篥の音きけば我世寂しく人の戀しく

せきあへずせきあへず流るゝ加茂川の水の心をひとはしらなく

びか一の祇園の櫻舞姫の金の扇にいさぎよく
散れ

逢狀をいだせし人を待つ宵かをかしき唄を醉
うてうたへる

島原道中 三首

春の日はいまし逝くらむ島原の胡蝶太夫に花
散りかゝる

島原の畫の郭のさんざめき春の日脚をしばし
とゞめよ

玉織のあけの踵のうすじめり花瓣よりもなや
ましきかな

抒情小景

しんしんと日の照る畑のまんなかに小犬とふ
たり遊ぶべかりき

戀人は路をよこぎる蝦蟆をも憎まずぢつと涙
たゝふる

すくすくと枝さしのべし川楊生きて相見む夏
きにけらし

なやましく夜の露臺に身をなげて今宵かも待
つ夏は來にけり

これやこのよりどころなき魂の風にふかるゝ
岸の青柳

木津川の河原の小石ぬらすほど夕かたまけて
春の雨ふる

たちわかれ近江の國の湖に波さわぐなり旅寢
しぬれば

東京愛慕

わが戀はかくもはかなし西河岸の一石橋も見
ずかなりなむ

黒谷の身をきる鐘のなりいづる夕かたまけて
戀はすべなし

音羽山清水寺の朝詣御籤をひけばまた凶と出
る

花道の蝶花形の提燈に灯をいるゝころぞ都こ
ひしき

築地なるルカ病院の窓の灯を數へつゝゆきし
夏は來りぬ

堀どめの水に映りし星よりもなほ遙かなる君
とこそおもへ

ウインナの白き卓よりほのかなる腕をいつか
まのあたり見む

夏來(なつく)ればかの並藏(なみくら)の白壁(しらかべ)にかげろふ飛(と)ぶをまたかへり見(み)む

幾夜(いくよ)かもあけ六つの鐘(かね)きゝつらむ薄命(はくめい)の子(こ)を思寢(おもひね)にして

思出を悲しきものに誰ぞやせし一石橋のしる
べ石はも

竹絲哀傷

寂しさが身をおとしめて唄ひ女のうたになみだをながす夕暮

みづからをおとしいやしめあざわらひ楊家の
子等と踊る佗しさ

とぼ〳〵と何をもとむる心ぞや夜としなれば
行きて歸らぬ

ほんのりと今日も夕となりにけりあまき涙を
湛へしまゝに

袖枕つひうたゝねのはかなさにまどろむひま
もあくる夏の夜

まどろまぬ夜のあけがたはいとせめて夢にも
見むと枕かたしく

夏の夜のかりねの床の夢のまにたつ浮名とも
思はざりしに

大阪より

並藏の奥の細道かたことゝ三味線彈のいぬる
たそがれ

大阪の難波新地の春の雪人形遣のお泣きやる
ものを

ある宵の道頓堀の人中を佗しげにゆく我を見
出でぬ

愁人山行

山見(やまみ)れば山(やま)はも寂(さび)し海見(うみみ)れば海(うみ)はも悲(かな)し人間(にんげん)なれば

汝が生れし甲斐はも哀し瑠璃色の葡萄の眼よ
り涙こぼるる

馬の鈴しやんらしやんらとさかりゆく心さぶ
しとたよりに書かむ

富士川の水際にたてば名なし草うすむらきに
こぼるゝものを

あまさかる乗鞍嶽の雲ゆわけほがら〳〵にい
づる太陽

富士川やたが吹きすさぶ笛の音ぞれいろうと
して身は秋にいる

秋の夜は息をひそめてひつそりと忍びて泣く
や草のゆるゝは

都をば遠くさかりて來つる山山見れば山は哀
しかりけり

山國ははや秋風の立ちそめぬ吾が思ふ子にさ
やりあらすな

青頭巾ふかくかむりて去にけむ秋に追はれし
人形遣は

秋風に追はれて山の町下る人形遣の青頭巾か
な

逢坂を越えて

さしよりて手を挈るよりぞすべをなみ幾山河
を越えて來し子に

越えて來し逢坂山はむらきの色こきほどの言の葉もがな

石山のかの水樓の欄干に言葉もなくて袖をかさねぬ

この年月求めしものをいまこゝに妹が眸のう
ちに見るかな

新しき身のをのゝきとおどろきをいまぞおぼ
ゆる妹を抱きて

「五月なり思出たまふことあらむ」言葉のたく
み憎ききみかな

瀬多川の瀬々にしく波ゆた〳〵に妹としあれ
ば小舟ゆらぐも

父が家をのがれて遠く來つる子はわが小夜床
にやすく眠れる

相倚れどなほうれしさのきはまりて泣かまほ
しさを何といふらむ

瀬多川の大堰の堰はとどむともかひくぐりつ
つ水は逢ふなり

里居

加州白山の峯つゞき藥王山の山合に、湯涌といふ溫泉場あり。金澤の城下より五里の山道、都の人のゆくところならねば、數戸の人家も夕は早く戸を鎖ざし、湯治の客も、近き在所の畑に出でゝ働くべくもなき老人が多し。寂しくはあれど、山のたゞずまひ雲のゆきかひ、朝夕眺めても飽くことを知らず。山には山の木の實みのり、畑には好める野菜ゆたかな

り。たま〳〵城下より酒買ひて音づるゝ舊友を加へ
妹が都ぶりの爪彈きに、舊歡うたゝ懷しかれど、敢
へて傷まず。
枕の下をゆく瀬の音に寢つかれぬ宵々は、更けて小
暗き浴室に下り、蟋蟀をきゝし佗しささへ、いまは
なか〳〵に懷しく哀傷かぎりなし。
湯涌なる山ふところの小春日に眠ぢ死なむ
ときみのいふなり

谷深き片山里をゆくときも妹としあれば都わ
すれつ

ふるさとの山の峡間の細徑を汝が辿りけむ姿
ほのみゆ

吾がためにつくるコヽアの匂ひより里居の朝
の秋立ちにけり

野守等が朝のいらへをして過ぐる女房ぶりも
なれし頃かな

妹がため通草をひくとたちよれば袖も袂も露
にぬれつゝ

鱗雲空を掩ひてわたる時人間の子等は山路を
越えぬ

斑猫の導くまゝにいざなはれをかしきまゝに
山路越えきぬ

山がつが木を伐る音の丁々と谷をわたりてひ
びくなりけり

木の實よりなほあたらしく若き野の草よりか
ろくよりそへるもの

ゆく秋の溪の沈默のきはまりてしづかにも我
等脣をよす

さや〳〵に葉ずれの音の涼しさをそがひにき
きて我等抱けり

さにづらふ木洩れ日のいろの紅の帶解きがて
にきく山鳩の聲

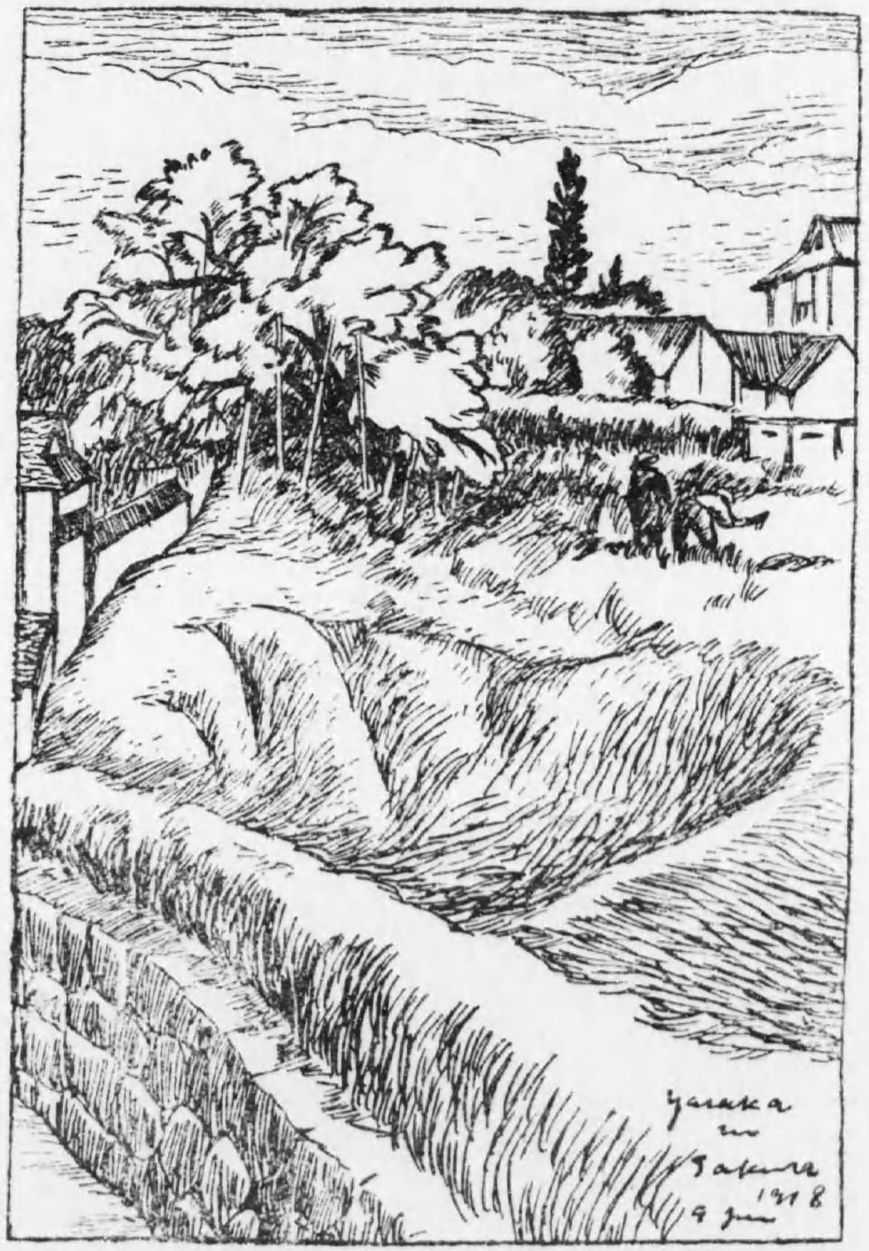
住吉詣

住吉の華表の上の初日出よく拜みね新妻なれば

住吉のかの反橋を渉るときつれなき人に吾を
してける

有馬山

有馬笠笠に姿はつゝめどもわが戀妻は人も知
りきや



有馬川瀬々にうく波ゆらゝにあやふく心き

みにのりつゝ

醍醐の春

さし乘りの伸をさして野守等が高笑ふらし醍
醐路の春

山科の木幡の道をさし乘りの俥羞らふ君なり

しかな

岩根ふみこゞしき宇治の山ゆけど妹としあれば岩もしらなくに

屋上庭園

過去の悲しい經驗を、未來の生活の上において考へることは堪へられない。痛ましい性の遺傳を自分の内に見ることは悲しい。すべてを振捨てゝ創造へ急ぐ、裸形の二人の足に、吁、眼に見えぬ鎖がついてゐる。忘却の穴へ、過ぎた二人の日記は埋めたが、どこからか闇に覆面した記憶の惡姿が迫つて來る。

身のうちに未知の世界を見ることを歡びとする
る悲しみとする

君のうちにわが歡びも悲しみもありと知る夜
の尊き禮拜

黑きものふつと心をかすめつゝ見返りがちに
あざみわらふも

はつたりと見まじきものに行逢ひぬ夢なりし
かば手にもとられず

悲しみが席をゆづりし歡びをしばらくありて
知りし侘しさ

つゝましく心のそばに寄添へる惡性ものを刺
しもかねつゝ

憎しみがとはにふたりをつなぐとはわけて男
の知らざりしかな

過ぎし日を今にかへさんすべをなみ手は手を
とれど心泣くなり

ありし日の少女のごときはぢらひを眼に見す
る子よ何を思へる

許せ子よ昨日と今日をひとつ身にまして女の
耐ふることかは

永遠の猶太人

二人は追はれた永遠の猶太人のやうに、街の片かげをとめてさまようた。

「何故そんなに俯むいてお歩きなさるの？　あなたがさうしてお日様に見放されたやうにしてお歩きになると、私までが、たよりなくなつて了ひますわ。あたし達はこれからなんですわ。

あなたは、勇氣はおあんなさるし技倆はおあんなさるしほんとに何だつて思通りになりますよ。
お寒いのでしたら、三味線を燒いてその火で溫りませう。
涙で繪具を溶きませう。
繪具がなくなつたら、私の血で描きませう。
枕には私の腕を。
そして、あつい接吻がお腹のたしにでもなるのだつたら……」

自棄の涙しづかに頰をつたふなり力足らざる
われと知る時
やはらかにあまき涙もらうかむなり白玉の子を
袖に抱けば

現身はゆくへもわかぬかなしみの涙の海のな
かにたゞよふ

それまではたゞそれまでは健かに生きむとお
もへば涙ながるゝ

寄添へよ野邊の草よりやはらかく春の雨より
いとこまやかに

そのかみの少女の日よりあたらしくやはらか
きもの心におぼゆる

あはれみが戀の寢椅子によりそふをうれしと
ぞおもひかなしとぞおもふ

自畫像

彼等は、自分を惡黨だと思つてゐる。
彼女等は、自分を善良な人間だと思つてゐる。どちらでも好い。だが、どちらでもいけない。自分のうちにはもつと別なものがある。それが自分を育て、そして勇氣を與へる。その精進を忘れまいために。

悲しみしあとのつゝましさ選まれしわれを大
切にせむと思へり

晴やかな朝かな何か身のうちに尊きものを感
じてあゆむ

たまきはる命ひかりて金色の身はうつゝとも
街をゆくなり

眞裸の身内をわたるこんじきの朝の風に涙こ
ぼるゝ

こゝはしも汝がとこしへの故郷ぞ涙ぬぐひて
ふかく寄添へ

女ともたゞひとりなる人間の靈ゆゑに身はあ
やまたず

別府より

さにづらふ紅の手絡し新妻は別府の山に吾を
まつとこそ

旅の身はかなしきものをわが妻のまして戀ひ
つゝ吾を待つらむに

そのかみの少女のごとき羞ひを十日見ざれば
眼に見するひと

夕闇に月草の花開くかときみのゑまひを久に
して見る

吾を見むと病をおしてきつる妹吾を見てしか
ばまた病みぬ妹は

旅の夜に氷をわると吾があれば遠方にして船の笛鳴る

小夜ふけていづらへむかふ船ならむけたゝましくも笛の鳴れるは

つばくら多く北より來り、海を越えて南へ向へり。

いでゝ見よかのつばくらの夫婦づれ今日はうれしき鹿島だちすも

人間の妻は病みたれ手を支へ空ゆく鳥を羨みにたれ

仇の手へ一驛毎に近ける汽車としきかばさも
こそ泣かめ

汽車はいま汝がこがれし宮島の岸をすぐるに
ふかく眠れる

入院

いまはこの事實を斜事的に書く餘裕を持たぬ。たよりない女は賣られて行つたのである。

朝夕を共にせしものをこの家によしや死ぬと
もあらむといへど

病院より籠が來つるといふ聲に布團の袖をかぶりて泣ける

吊籠に添うて歩めばとく〳〵と妹が涙の音のきこゆる

「など死なむ君へ債を酬いずば賣られしまゝになど死ぬべけむ」

など死なむ悲しきことを言ふなかれ生くることのみが正しき證ぞ

父がまへに事のもとするつばらかに證さむと
するいぢらしさはも

やゝこしきねたみそねみのなかにしてしみじ
み生くる美しさ見よ

つゝましくかしこき命いたはりて好き日を見
むと手をとりて泣く

憤りの心もいつかなごむなり腕まかせて寢ぬ
る君見れば

病床のたよりに「名を惜んで下さい。彼等は彼等、私等は私等、交る時のない平行線でムいます。大切な大切なものを彼等のために費すのは惜うムいます あたしは靜かになれました。どうぞ心おきなうあなたのお仕事大切にして下さい。逢ひたいけれど……しの」とありしに。

赦しやらむ卑しきものは赦しやらむ彼等も等しく土になるもの

「春は來ぬ今年は誰と羽根追はむ」細りし指を數へつゝいふ

病室の隅におかれし塗下駄のさはこそやさしきみをまてるに

MIMAZIKIMONO

縁ありて江戸紫の駒下駄をはいて逢ふ夜はい
つの春ぞも

君おきて吾が外國へ何をかもたゞにしたひて
ゆかじとぞおもふ

彼は人々の運命を恐るべきことを知らない。
彼はすべてのものに掛値をつける。だから彼は人の心を値切る。彼の妻をも値切る。だから彼は彼の妻に不信をおいてゐる。彼はまた人生を値切る。そして、彼の壽命をさへ値切るのだ。

贋金の指環をひさぐ男よりすこしまさりて身をも賣るなり

品下るわけて女のクラーカは戀を芝居のごと
く思へり

みだらなる話を好むかの女食うて笑うて泣い
てあるらむ

東京行

秋立てばつまはめをつれふるさとへ渡り鳥さ
へかへるならひを

さだめなき旅に枕をかさねつゝいまはた遠く
おきてかへるも

かたはらにありし日にさへ寂しさをせんすべ
もなくかこちしものを

あめつちにわがひとりなる妻おきてさすがに
旅へいづる心の

うつし世に妻とよびはた夫とよぶもかりそめ
ならぬ運命とぞ知る

送る人送らるゝ人打寄りてこゝろ〳〵にたゝ
ずむ停車場

東京驛

ふるさとへ歸る心できたものをながれてくれ
ばやはり寂しい

親と子が知らぬ他國へきたやうに悄然と下り
る廣い停車場

親と子がある寒い日に東京へ下りたと書けば
詩のやうだけれど

街を歩く心持

灯ともし夜になると無闇と人が懐かしく、明るい所
明るい所ととめて歩いたその夜の心持ではない。
オピアム・イタアのやみがたき誘惑と不安に似たもの
が、群集を厭ひながら、なほ街を歩かせる。それは何
であらう。

風がひとりふけし巷を走るなり風にさそはれ
てあゆむ心か

ひそやかに我にしたがふ影のありその影ゆゑ
にやまず走れる

ほつかりと電氣つきしにおどろきぬ何とて我
の泣きゐたりけむ

涙もてパンを裂きたるふたりなりかく言ひ得
るを歡びとせよ

いかなることぞ、今年東京の街路樹は悉く青葉をつけたり。

冬ながら銀座の柳芽をはりて五月に似るとこ
とづてにせむ

銀座なる街の柳は芽ぐむとも昔の人にまた逢
はめやも

生れきて妻とよびはた夫とよぶもかりそめな
らぬ尊ふとき運命

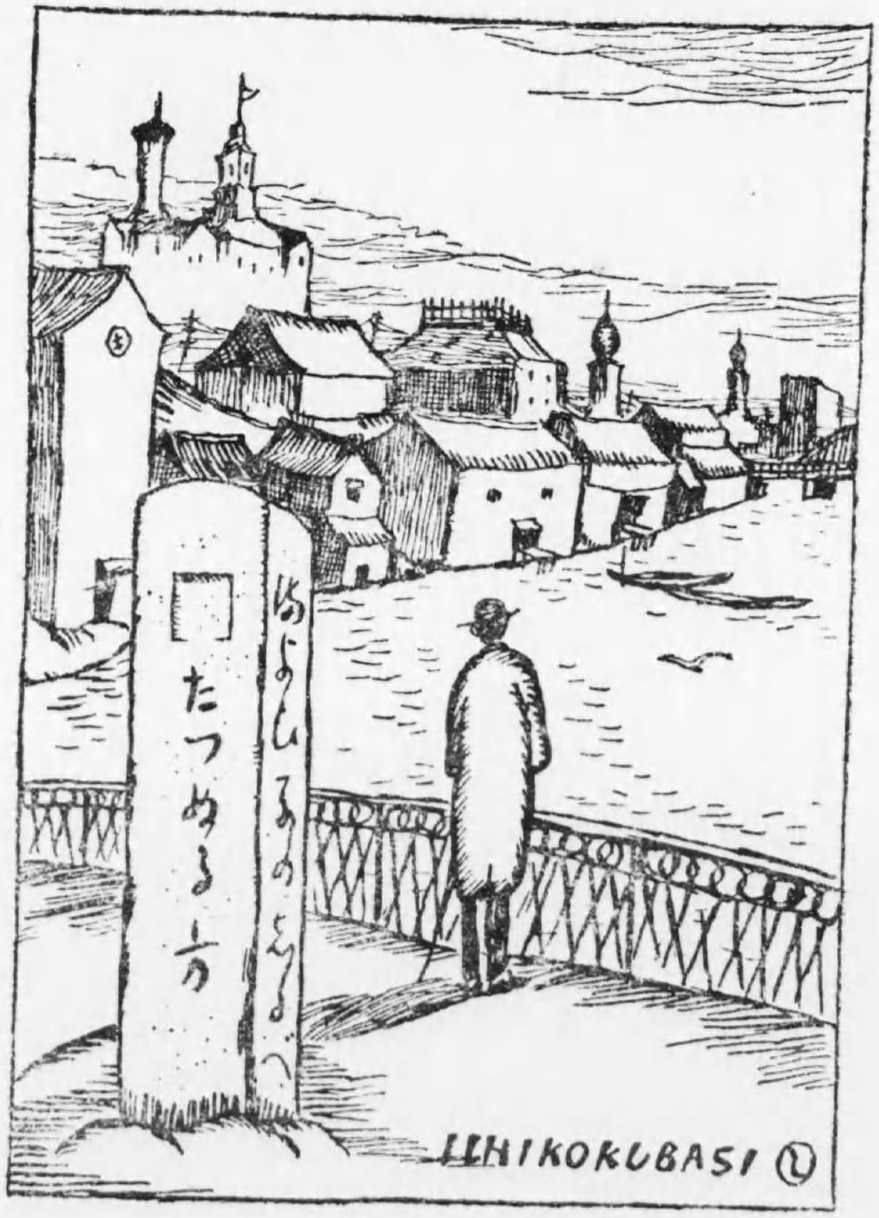
まれに來るこの歡びは何ならむかならずとも
に欺かるゝな

帝劇にて勘彌のロミオをみる。

わがロミオ墓穴くだる心持にて病室の戸を入りにけるかな

鎌倉河岸

足ひとり鎌倉河岸をあゆむなり眼には見まじきものを見るなり



晝日中一石橋にたちつくし何を眺むる男なるらむ

誰に逢ふあてもなければ仁丹の廣告燈をながめゐにけむ。

灰色の室

隣室のおろしや人の夜啼きにも馴れそめし宿の暗き壁かな

ひとすぢに君が心へゆく道の白き土ともたま
づさをまく

風吹かば八坂の塔の風鐸のからからと鳴るを妹
きくらむか

八十街の銀座の街をゆくときも吾は妹おもふ
わが妹なれば

久なりし一石橋をゆく人の誰としらばやゆき
すぎにけむ

セレナアド第一版をなつかしみ小さき旅へい
でしもこのころ
服のまゝ轉寢をする癖のつきぬ寂しき癖のつ
きしものかな

TOKIWA BASHI

あきらめ

ほんとうの事を言ふからいけないのだ、でたらめを言へ口から出まかせに

錢金で女を賣買することはボルネシア島の事
ではなかつた

心の中へぽかんと大きな穴があき、そこから寂
寞が湧いてくるなり

どうせ成るやうにしか成らぬとあきらめても
あきらめられず

「時がすべてを解決してくれるよ」と親しい友は
言つて呉れるが

掌を開けて見たけれど何もなし、たしか持つて
ゐたつもりなりしに

新聞の欄外までもみんな讀みしが、面白きこ
ともなし轉寢をする

愛兒篇

この一篇を、ちこへ。お前はすぐこれが讀
めるやうになるであらう。

愛兒篇

子を置きて夜慌しく旅へいでしことありき。

否みつゝあきらめがてにだせし手を放さじも
のと脣へあつ

スペインのお伽噺の王子さへ泣きしものをと
せきあぐる子よ

汝よりもいとしきものゝ世にありと思ひしる
日の汝のいとしさ

いとしさといぢらしさとを隔てつゝ秤らむと
する父を憎むな

やがて汝が玩具欲りせぬやうになり母なき責
を父にやたづねむ

愛兒を家にのこしていづる夜の夜霧ぞふかく
家をつゝめる

「はや歸りてよ」かく言ひながらいだす手の柔か
きかもなんとすべけむ

泣くなかれはや歸りきて添寢してマルコの話
またせうづもの

いとほしき汝をのこしてなが父はいとしきも
のに逢ひにゆくぞも

すや〳〵と眠れる吾子をさまさじと忍び足し
てパヽやゆきけむ

ひとすぢのレールは哀し子をおきてましぐら
に走るレールは哀し

別れの手いなみしときのむづかりも新しく胸
によみがへる朝

汽車日市を過ぐる頃夜明けぬ。廣重の山の端に、冬枯れのミレーの耕地見えそめ、離愁きはまりなし。

UNO NO YAMA

ぽつつりと野末にひとつ消えのこる朝の灯よ

汝も目さめつらむを

朝の床傍に父のあらざればむづかりてあらむ

泣いてやあらむ

食卓の朝の祈禱もおぼつかな寂しき様を父は
おもへる

淺草遊覽圖

加賀の溫泉にゐた時も、別府の海水浴へいつた時も
また、京都で病氣した時も、「淺草へ往うよ」とよく
パヽにせがんだ。そんな時には、「あゝよし〳〵、今
にね」と言ふと「いまにはいや、さあでなくちや」
お前はさう言つては、パヽを困らせたが、今日こそ
さあ、淺草へ來たよ。三年振りだ。お前も嬉しいか
パヽも嬉しい。

さあこゝが觀音様だ豪勢な提灯を見よまた鳩
を見よ

提灯は昔ながらにぶら〳〵とかうしてゐても
過せる世かも

豆をやれ、うんとこさ鳩に豆をやれ、お前の
やうな小鳩にもやれ

どれもこれもみんな可愛い〻鳩の子だ。そち
は可愛い〻人間の子だ

あれとこれがほんに夫婦であらうもの口をよ
せつゝよりそへるはや

寄添へよ。天下晴れての夫婦者、人間のやう
に遠慮をするな

鳩の婆よ、お前も屋根からおりといで、たべ
たらそこでゆつくりお休み

さめ〴〵と觀音堂の暗がりに憐を乞へる母と
子も見た